

3月23日パレスチナ・スカイプ・ミーティング 「PBのパレスチナ事業を知りたい」報告

日時：2012年3月23日（金）17：00～18：30

場所：PB事務所

参加者：PB会員、スタッフ

司会：渡邊素子（パレスチナ事業国内スタッフ）

報告者：今村沙絵（パレスチナ現地事業担当者）

◆PBのパレスチナ事業のこれまでの流れと今回の事業概要を説明（渡邊より）

PBは特に2009年から運営するカフェ・パコのスペースを利用してパレスチナ関連の講演会やイベントを実施し、この問題の広島の方々への周知という間接的な現地支援を行ってきた。その後、より直接的な支援へのステップとして2010年にパレスチナ自治区ヨルダン川西岸に2名の調査員を送り、現地の若者の生活状況や、彼らのストレスケアに演劇の手法を利用することの可能性を調査した。その調査結果を基に2012年1月に開始されたのが、今回の教育支援事業。ヨルダン川西岸のヘブロン市において地元の劇団 Yes Theatre と協力し、ドラマ・セラピーの手法を学ぶワークショップを通して、子供や若者のストレスケアに繋げることが狙い。パレスチナ自治区ヨルダン川西岸で最大の都市であるヘブロン市全体に支援を行き届かせるため、この事業では子供たちに直接ワークショップを行うのではなく、日常的に子供に接する教員やソーシャル・ワーカーを対象にワークショップを行い、学んだことをそれぞれの現場で活かしてもらう方法をとっている。また、ドラマ・セラピーに関する専門書などを Yes Theatre の図書館に集めて公開することで、現地での知識の蓄積も目指している。

カウンター・パートである Yes Theatre は2010年の調査事業の際に出会った劇団で、ドラマ・セラピーの専門家を要している。今回の事業のメインであるワークショップは10回一組のワークショップを対象者を変えて全9回実施予定。ヘブロンの教育省を通じて参加者を募集したところ、100名以上の教員とソーシャル・ワーカー、さらに地元NGOから70名の参加希望が寄せられ、この事業への現地での関心の高さを感じることができる。

2012年3月6日に第1回のワークショップが実施された。

◆ワークショップや現地の様子について報告（今村より）

※適宜司会より質問を交えながら

まず第一回目のワークショップの参加者に関しては、

- ・参加者数計11名
- ・男性3名、女性8名
- ・年齢層23歳～45歳

・NGO 参加者 3 名、教員・ソーシャルワーカー 8 名

ワークショップでは日本で言う「だるまさんが転んだ」などの平易なシアターゲームから徐々に自己表現を促す複雑なワークを実施していく。ゲームの効果としては、相手の反応を見たり、集中力をつけるなど、コミュニケーション能力の向上が期待できる。参加者の反応はおおむね好評だが、期間延長を求める声、男女混合のワークについて配慮を求める声もあった。全ワークショップ実施回数の内、後半部分では児童保護のレクチャーも予定されており、子供たちが安全に自由な自己表現を行っていく意義について理解を深める。また、実際に学んだことを各自の現場で如何に活かすかのプランニングも予定されている。さらに、ワークショップ終了の 1 か月後に実際に職場で実施した際のレポートを要請する予定であり、継続的に参加者とコミュニケーションをとりつつ、フィードバックを得ていく計画。

・(司会より質問)

何故特にヘブロンの子供たちには、ワークショップに組み込まれているような、コミュニケーション能力を育てることやストレスケアが必要と考えられるのか？

・(今村より回答)

理由としては、ヘブロンの内的な特徴と外的な要因の 2 つが挙げられる。

まず内的な要因としては、ヘブロンには子供が多く、1 つの家庭で平均 4 から 6 人程度の子供がいる。さらに古くからある街で親戚同士の繋がりも強いいため、1 族の中で毎年何人も新しく子供が生まれていることになる。そうすると、親をはじめ家族に注目してもらえ期間が短くなるせいもあって、ひとりひとりの子供が自己主張に一生懸命になってしまうため、他者の様子や反応を見る等のコミュニケーション能力を意識して伸ばすことが必要になってくる。しかし、学校でも子供が多く、教員がひとりひとりの子供をケアするのが難しいため、学校にソーシャルワーカーを配置するなどの対策もとられている。

また、ヘブロンは世界最古の街として数えられるほど古い街なので、伝統が重んじられる一方、保守的な傾向が強く、子供や若者が自由に自己表現をする場が限られているという面もある。

次に外的な要因としては、イスラエルの占領政策によって常に身近に緊張があるという環境が挙げられる。ヘブロンの市内は H1 エリア (パレスチナ側に多くの権限がある地域) と H2 エリア (治安部分をイスラエル側が担当するエリア) に分かれており、特にその境界では日常的にトラブルが起こる (イスラエル兵や入植者による嫌がらせや、チェックポイントで阻まれるなど)。日常的に銃撃戦などがあるわけではないが、このような「何が起こってもおかしくない」状況がある。今回のワークショップでも、夫が逮捕されたので参加できなくなった人や、H2 エリア在住の参加者が会場まで来られないというようなことがあった。そのような話が日常的にある一方で、大人たちはそれを語りたがらず、できるだけ平

常心で生活しようとしている。しかし、何か良くないことが起こっているということは子供たちにも分かっている。このような状況が子供にどう影響してくるかという、緊張や問題が生活の中にありながらも、それがなくなかのように生活していく、という 2 重の裏返しの構造の中で、かなり幼いころから不安感を抱えて育っていくことになる。これらが事業実施地としてヘブロンを選んだ理由といえる。

◆質疑応答

Q1. パレスチナの治安はどうか。

A. スリ・泥棒などの犯罪といった意味では治安は非常にいい。個人的に感じるのは、この背景には現地の人の非常に誇り高い気質があるのではないかと。子供たちにも人の物をとったり、何かを独り占めしたりしてはいけないという教育が徹底されている。政治的な面では、ヨルダン川西岸地区はガザ地区と違って、突然イスラエル側から攻撃があるというような心配はない。ただ、そこそこに兵士が配置されている。今村が滞在しているベツレヘムから事業地のヘブロンまでの道路にもロードブロックが置かれ、難民キャンプの周囲には常に兵士がおり、時には戦車を見ることもある。聞くところによるとそのような警戒態勢は緩んできているというが、まだまだ緊張感を感じる。

Q2. パレスチナに渡航してからどのような点で苦労したか。

A. 1 月末に渡航してからは、主にワークショップの準備作業を行っていた。特にカウンターパートの Yes Theatre のスタッフとカリキュラムに関する議論の際（ワークショップで、ドラマ・エデュケーションに特化した人材を育成するのか、一般の教員が日常の授業の中で活かせるような内容にするか等。結局後者の方針となった。）、現地の人の気質か、相手が議論の佳境でかなりヒートアップする場面があり、負けないようにするのが大変だった。

また、パレスチナ自治政府内で腐敗があることに関しては、現地でも指摘されているが、実際にそのような雰囲気を感じる場面があった。例えばヨーロッパの各国政府からかなりの資金援助がされているはずだが、必要などころに行きわたっておらず、行政事務所の狭い部屋で複数人が仕事をしていたり、効果的に活かされていない。また、今回の事業では参加者募集などでヘブロン教育省（行政区が広いので事務所が 3 か所設置されている）の協力を求めたが、積極的に協力してくれる事務所がある一方、中央政府の決定がないと難しい等の理由を挙げ、協力を消極的な事務所もあり、そのような難しさを感じた。

Q3. ワークショップを男女別々にするという選択肢はなかったのか？

A. 今回は参加者の視野を広げるためにあえて男女混合のスタイルにした。ヘブロンではほとんどの小学校が男女別々で、教員も男女別に配置されている。そうするとどうしても視野が自分の学校内に限られるので、男女混合とすることで、情報交換や悩みの共有などのできる環境を作りたかった。これは共有した課題に対してどのように対処していくか一緒に考えることにもつながっていくと考える。そうした目的で、男女に限らず、できるだけ違った地域、機関、所属（教員、ソーシャルワーカー、NGO スタッフなど）の参加者を選別するようにした。普段接する機会のない人々を集めることで、情報交換やネットワークづくりが可能となる。そのような多様な人々によるグループワークでうまくいかないことが起こってきたとしても、それを如何に解決していくか考えることも、知識としてではなく体験として同じ問題に取り組むトレーニングになると考えている。

Q4. 参加者はその後ワークショップで学んだことをどう活かすことが想定されているのか。

A. ワークショップの中で行われるゲームの中には暗記をするのに役立つものもあり、これは通常の授業にも取り入れることができる。他にも授業の前に集中力を高めるのに役立ったり、課外授業などでの活用も想定されている。

Q5. 現地での食べ物はどのようなものがあるか。

A. 主食はパンだが、米も手にはいる。ヘブロンではラクダを食べる習慣もある。魚はあまり食べないようだが、イスラエルや他のアラブ諸国から輸入されたものが冷凍で売られている。野菜に関しては、八百屋に並ぶ野菜はイスラエルからの輸入品が多く、日本でいう JA の様な組合は機能していないように見える。パレスチナの農家は道路わきなどで販売しているのを見かける。これにはイスラエルからの輸入品にはイスラエル側に税金がかかるため、価格が安く、生産量も多いためパレスチナの小規模農家が競争に勝てないという要因もあると言われている。また、パレスチナ側の農家に関しては八百屋までのアクセスも難しい面がある。

Q6. 物価はどうか。

A. 日常的な食品などは安い（例：パン 10 枚入りで 5 NIS＝約 100 円、ヨーグルト 350ml が 4 NIS＝約 80 円等）、肉類や加工食品は日本とあまり変わらない。一方ガソリンは 1ℓで日本円にして 160 円～170 円などかなり高価。

Q7. 水の利用はどうか。節水などはされているのか。

A. 生活用水に関しては、今は雨季でさらに今年は雨や雪が多いことから節水などは行われていない。一方農業用水に関しては常に水不足の問題がある。これにはイスラエルによって地下水など水源へのアクセスが制限されていることも原因にある。

Q8. 日本、広島などに対する現地の人の印象はどうか。

A. 日本人に対する印象は良く、広島も長崎と共に原爆投下された街としてよく知られている。また、地震や福島原発事故のことも知られており、「今は大丈夫なのか」と聞かれることもある。

Q9. 現地の人々はどのように海外の情報を得ているのか。

A. インターネット、衛星放送などを通じて情報を得ている。衛星放送のチャンネルは多く、600チャンネルほど見ることができる。レバノンやサウジアラビアの番組も人気。パレスチナの放送局もある。

Q10. イランのことが問題になっているが、これによってイスラエルからのパレスチナへの圧力に変化はあったか。

A. 日常生活ではあまりそのような変化は感じられない。しかし、ガザとヨルダン川西岸でハマス、ファタハに分かれていた自治政府が挙国一致内閣の発足に向けて行っていた交渉が中断されている。ハマスがイランから援助を受けているため、このままでは挙国一致内閣が発足した後イスラエルから不信感を持たれるとファタハが主張している。このようにパレスチナ内部の和解がイラン問題からとん挫している現状はある。また、シリアの状況も不安定。イスラエルとしては、エジプトに続きシリアも反イスラエル政権になるのではという危機感が強い。さらに、パレスチナ人の人口増加にもイスラエルは強い危機感を持っている。人口減によるイスラエルの弱体化を防ぐため、アフリカなどからのユダヤ教徒の入植に力を入れている。このような内部的な要因が今後パレスチナへの圧力に影響してくる可能性はある。

Q11. イスラエル市民と接する機会はあるか。

A. イスラエル市民の中でも世俗的な人々とは行政、不動産会社などで接する機会はある。より厳格なユダヤ教徒とは接したことはない。パレスチナ側もイスラエル側もお互いに関わらないようにしているように感じる。

Q12. 現地に外国人はどのくらいいるか。

A. 滞在先のベツレヘム（ヘブロン北）はキリストが生まれた町であり、大きな観光地なので、外国人観光客も非常に多い。一方事業地のヘブロンではほとんど外国人を見ることはない。ヘブロン H2 エリアにあるイブラーヒムモスクも昔は観光地だったが、現在はまったく観光客は見られず、外国人は活動家や国際機関の職員くらい。ベツレヘムの人々は外国人慣れしているが、ヘブロンの人々の多くは外国人と交流したいという気持ちはあるものの、比較的姿勢は内向きといえる。こうしてみると地域差は非常に大きいと言える。ヘブロンはパレスチナの中でも保守的で難しい地域とされているようだ。

◆参加者からのアンケート結果

4月26日の中間活動報告会で聞きたいこと

- ・パレスチナの独立についてはメディアで色々と報道されているが（楽観論・悲観論）現地での一般の人々の予想と今村さんの思いを聞かせてほしい。
- ・ドラマ・セラピーというあまり聞いたことのない手法だが、この手法を使ったワークショップはどのように考えたのか（カリキュラムの作り方やワークショップの進め方など何をベースにしているのか。PBで全て考えているのか。）
- ・パレスチナの事については自分はほとんど知識がない。以前読んだ児童文学ではパレスチナの子供とイスラエルの子供が友情を育むというテーマだったが、実際そのような機会、可能性はあるのか。あるとすればどういう状況か。
- ・ドラマ・エデュケーションの実際の効果、Before & After が是非知りたい。
- ・実際にどんな様子でドラマ・セラピー指導をしているのか、もし動画や写真があれば、是非見たい。
- ・まだ始めたばかりなのでドラマ・セラピーの効果を見るのはなかなか難しいとは思いますが、すでに先生が実施した学校や団体等があれば、子供たちの反応や経過について、少しでもデータを見たい。
- ・現地の子供たちは、将来何になりたい、海外に行きたいなど、そういう考えは持っているのか。夢、みたいなものはあるのか。まさか「兵隊になりたい」子供が多かったりするのだろうか。今村さんが直接子供たちの考えを聞く機会があるかどうかかわからないが、もし子供たちの声を聞く機会があれば、子供たちの「夢」についても報告していただくと嬉しい。また、同時に、大人たちは子供たちに将来何を期待しているのか（あるいは、していないのか・・・）ということも、今村さんが感じたことを報告してもらえたらと思う。

スカイプ・ミーティングの感想

- ・次回も定期的開催してほしい。

- ・普段メディアから流れてくる情報だけでは分からない現地の中の声が聞けてとてもよかった。また、ドラマ・セラピーという手法もとても興味深かった。
- ・PBの活動の様子を直接見るのは初めてだったが、機会があればまた参加したい。
- ・今村さんが元気そうでよかった。
- ・タイムリーに現地と会話できて、雰囲気もそれとなく伝わってきたので、楽しかった。今村さんの元気な顔が見られてよかった。
- ・今村さんが現地で活動しながら感じていること（難しさ等）を知ることができ、文化のことや、食べ物の話も聞けてよかった。
- ・現地の風景（室内や建物の外）も少し見てみたかった。
- ・一方的な「報告」ではなく、参加者からの質問も多くてよかった。
- ・配付資料があったのは、とても助かった。
- ・ドラマ・セラピーも、継続しないと効果がないものだと思うので現地でずっと継続して何年も何年も、続けていけるといいと思う（現地の人が引き継いでいってくれるようになればいいと思う。）

以上